

雪氷研究大会 (2009・札幌) の開催報告

1. 全体概要

今年の全国大会である雪氷研究大会 (2009・札幌) は、北海道大学・学術交流会館を中心に、(社) 日本雪氷学会 (以下、雪氷学会とする)、日本雪工学会 (以下、雪工学会とする) の主催により、2009 年 9 月 29 日 (火) から 10 月 3 日 (土) まで開催された。

旭川大会から 4 年ぶりの北海道開催となり、今回も両学会の共催で行った。共同開催は旭川大会が最初であり、本大会で 2 巡目に入ったこととなる。旭川大会にも携わった著者にとっては感慨深く、また共同開催が定着してきたといえよう。

プログラムは研究発表 (口頭・ポスター) を中心に企画セッション (新規)、分科会セッション、公開講演会、雪氷楽会 (日本雪氷学会主催)、サイエンスカフェ (日本雪氷学会北海道支部主催)、懇親会、各種会合 (委員会・分科会等) で構成した。公開講演会と雪氷楽会は札幌市円山動物園内で開催した。

本大会では、研究発表において両学会の発表カテゴリを完全に合同化させた。また、学会外とのつながりを強化し、雪氷関連研究が広がることを期待して「企画セッション」を新たに企画するとともに、雪氷学会「分科会セッション」についても全ての大会参加者の聴講が可能となるように依頼した。

大会参加者 (登録者) は約 450 名であった。

大会実行委員会は、苫米地司 (北海道工業大学) を委員長とし北海道内の大学、研究所、団体、企業等から計 46 名で構成した。

2. 開会式

天気にも恵まれた 9 月 30 日 (水)、心配していた初日受付の混雑もほとんど無く、開会式を迎えられた。開会式の冒頭、苫米地実行委員長が今大会が 7 つの企画セッションを初め、広く他分野や社会との接点を広げる試みを多く盛り込んだことなどを紹介しながら、開会を宣言した。

引き続き、日本雪氷学会の藤井、雪工学会の植

松、両学会長は、両学会の大会合同開催を重ねて、研究発表の合同化や企画セッションを準備するなど、連携度合いが深まっており、新たな研究進展の契機となることを期待するとの挨拶を述べられた。

3. 研究発表 (口頭発表)

口頭発表は 14 のセッションで行われた。研究発表の登録時には投稿者に昨年度と同数の 33 研究分野から自分の発表分野を選んでいただいたが、関連分野をなるべく統合することと、発表者の少ない分野は近い分野と組み合わせで 1 つのセッションを構成することで、1 セッションあたり 7~12 件の発表とした。皆様のご協力に感謝したい。

発表件数は 129 件と昨年度より若干増で、ポスター発表 (後述) とほぼ同規模の件数となった。この件数を 3 日間に収めるため、1 件あたりの発表時間は 12 分 (発表 9 分、質疑応答 3 分)、3 会場同時進行を基本として設定した。なるべく関連分野は同時開催しないように心掛けたが、聞きたい発表が重なり、セッション途中で会場を替わる参加者が見られた。

会場は北海道大学学術交流会館の K (310 名)、A (150 名)、B (194 名)、C (50 名)、D (50 名) の 5 会場を用いた。今大会規模の参加人数では A、B 両会場の大きさが適正だが、A 会場をポスター発表に使うため、準備期間を含めてこれと平行して行われたセッションでは 50 名規模の会場で聴衆が溢れてご不便をおかけした。

発表はすべて PC プロジェクターを使って行われ、発表ファイルを発表前に専用 PC にアップロードして頂いた。またご自身の PC を使う発表者用に PC 切り替え器を各会場に設置し、円滑な運営に心掛けた。この結果からか、発表に関わる混乱はほとんどなかった。

3.1 研究発表 (ポスター発表)

ポスターは 9 月 30 日 (水) に A 会場において 123 件の発表があった。ポスター展示はポスター



図 1 ポスター発表会場の様子

1（午前）とポスター 2（午後）の 2 回に分け、昼休みに貼り替えた。貼り出し時間は 2 時間半で、そのうち 1 時間をコアタイムとした。

ポスターを張り出すパネルは A0 サイズをレンタルしたが、貼り出し、貼り替えは滞りなく行われた。A 会場は翌日から口頭発表会場となるため、ポスターは発表時間が終わるとすぐ撤収していただいた。時間とスペースの制約上このような配分となったので、ポスターを回って発表者と議論をするには時間が足りない参加者がいらしたかもしれない。今後はコアタイムの充実と貼り出し時間の拡大を計画されると、より充実したポスター発表となるであろう。

4. VIP 賞と学生奨励賞

4.1 VIP 賞

VIP 賞（Very Impressive Presentation 賞）は「遊び心を持ちつつ、若手会員の奮起を促し、全国大会を楽しく盛り上げる」ということを目的に樋口敬二名誉会員の寄付により行われている賞で、今回で 7 回目となった。今回の対象者はポスター発表を行う概ね 35 歳以下の両学会会員で、今年は 23 名のエントリーがあった。7 名の審査委員による選考の結果、次の最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名が表彰された。

最優秀賞：津滝俊（北海道大学大学院環境科学院）「スイス・ローヌ氷河における氷河湖成長と氷河後退への影響」

優秀賞：石田依子（千葉大学大学院理学研究科）「アジアの山岳氷河のアイスコア中に含まれ

る固体粒子の特性」

優秀賞：町田敬（長岡技術科学大学）「雪中爆破による爆雪圧と発破騒音の計測」

優秀賞：原田裕介（（株）アルゴス/岩手大学大学院連合農学研究科）「長期観測に基づく積雪下の土の凍結融解特性—凍土消失日とその長期傾向の推定—」

受賞者には賞状・賞牌のほか副賞としてデジタルフォトフレーム（最優秀賞）と北大グッズの大吟醸・梅酒・グラスセット（優秀賞）が贈られた。

4.2 学生奨励賞

本大会では、大会実行委員会から口頭発表の学生・大学院生を褒賞する雪氷研究大会（2009・札幌）学生奨励賞を創設した。投稿された講演要旨の内容より、研究の独創性、論理性、明瞭性および発展性などを総合的に審査し選考した結果、次の 3 名が優秀賞に選ばれた。

西村大輔（北海道大学大学院環境科学院）「傾斜計によるスイスアルプス・ローヌ氷河末端部の掘削孔変形観測」

加藤孝春（富山大学大学院理工学教育部）「低温雲箱を用いたエアロゾルの氷晶核化能力測定」

渡邊直樹（北見工業大学大学院）「マイクロ波放射計を用いた冬季路面状態判別方法の開発」

受賞者には賞状のほか、副賞としてボールペンが贈られた。

5. 企画セッション

企画セッションは、学会員以外の方も聴講可能なオーガナイズドセッションである。7 件のセッ



図 2 企画セッション，雪カフェ

ションが企画され、そのテーマは、雪氷物理、凍土、吹雪・融雪現象の数値モデル、凍結路面管理、道路吹雪対策、積雪寒冷地での生活など、様々な分野で構成された。参加者数は、各セッションで 30~70 名であり、企画セッション全体の延べ人数は 400 名程度であった。

6. 分科会セッション

本大会では、雪氷学会の 9 分科会と氷河情報センターの分科会セッションが開催された（気象水文分科会と衛星観測分科会は合同セッション）。9 月 30 日夕刻には 4 つの分科会が並列開催されたが、参加者が重複する分科会セッションは異なる時間帯で開催することに配慮した。このうち雪氷工学分科会は別棟会場での開催であったが、ABS 関連やハイテク除雪法などの新技術が紹介され、参加者は興味深く聴き入っていた。各セッションの参加者は 20~60 名程、総数で 350 名程の参加があった。

7. 技術展示

本大会では、メーカーや商社、研究所等から 9 件の技術展示があり、研究成果や気象測器等について紹介が行われた。展示場所は学術交流会館エントランスロビーとし、目につきやすいことから多数の来場があり、大いに賑わいを見せた。

8. 各種会合

各種会合は、雪氷学会関連として授賞式や委員会等の 14 会合、雪工学会関連として受賞記念講演や委員会等の 7 会合が開催された。

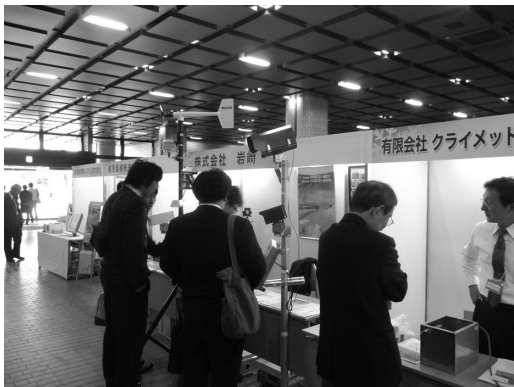


図 3 技術展示の各ブース



図 4 懇親会での鏡割り

9. 懇親会

10 月 1 日（木）に開催された懇親会は、北海道大学はるにれ食堂において約 260 名の参加者により行われた。懇親会では、雪氷学会による学術賞、平田賞、論文賞、功績賞及び雪工学会による学術賞、学術奨励賞、功労賞の受賞者の紹介が行われた後、大会の学生奨励賞、VIP 賞の発表、授賞式が行われ、受賞者の歓喜があがった。

また、北海道にちなんだ地酒、鮭、ジャガイモなどの地産地消のメニューに加え、地酒を雪で冷やすなどの趣向を凝らしたおもてなしは、参加者に大いに満足していただけたと感じている。

10. 公開講演会

公開講演会は、札幌市円山動物園の動物科学館で行い、参加者は約 100 名であった。講演会では、「雪や寒さと教育」をテーマに 2 題の講演をいただいた。

北海道雪プロジェクト世話人、新保元康氏からは「雪と学校教育」と題し、学校が繋ぎ役となり、雪に関する取り組み事例について講演いただいた。雪氷教材の情報の提示・交流を行っているウェブサイト「北海道雪たんけん館」などの雪氷の教材化についての取り組みや、冬期通学路の安全確保を目的とした砂捲きボランティアや学校グラウンドを開放した校区排雪などが紹介された。

また、北海道大学環境科学院の中村一樹氏からは「雪を学ぶ！雪で学ぶ？雪から学ぶ～雪氷体験による楽しい学び～」と題して、雪氷体験が少ない子どもたちが増えていることを踏まえて、氏が

行った雪を活かした様々な「楽しい」「学び」体験の実例として、野外雪氷観察や雪中泊体験、雪質調査体験、雪氷楽会等について紹介いただいた。

11. 雪氷楽会

平成 21 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「研究成果公开发表（B）」補助事業として、「雪氷楽会 in SAPPORO 雪と氷の「ふしぎ」を一緒に考えよう」を最終日である 10 月 3 日（土）の 10 時～16 時に開催した。

一般の人が多く集まる札幌市円山動物園を会場としたため、当日は当初予定をはるかに上回る約 2500 人に参加頂いた。

26 件の出展による雪や氷にまつわる実験・体験・演示コーナーと、積雪寒冷地の動物（ユキヒョウ、フンボルトペンギン、ホッキョクグマ、エゾシカ）の前で研究者と飼育員が動物とその生育環境について語る世界の雪氷圏ツアーを、多くの研究者・教育関係者・学生などの協力を得て、開催できた。

参加者の感想も概ね好評であり、類似の催しがあればまた参加したいとの声を多数頂いた。

12. おわりに

大会には、国土交通省北海道開発局、北海道、札幌市、札幌市教育委員会、寒地土木研究所、北海道新聞社、在札各放送局などから後援をいただいた。後援手続きや事前に説明する機会を設けたことで、大会期間中、新聞社・テレビ局等の取材があり、大会状況が報道された。

また北海道大学、札幌市円山動物園からは会場利用について便宜をいただいた。このほか、細かな点を含めてご協力いただいた各位にお礼申し上げたい。

なお、本大会についての問い合わせは、以下の事務局までお願いします。

【大会事務局】

寒地土木研究所 雪氷チーム内

（事務局長 伊東宛）

TEL：011-841-1746

E-mail：yasu-ito@ceri.go.jp

13. 次回開催地

次年度開催地は仙台が予定されており、大会実行委員長の沼野夏生氏（東北工業大学）の下、準備が進められている。

（土木研究所 寒地土木研究所 伊東靖彦）

（2009 年 12 月 4 日受付）